

On A Wind from The South

The First European Impact on Japanese Culture

記録

35ミリ

カラー／29分

英・仏・独・伊・西・
葡・中・インドネシ
ア・アラビア・タイ語
版

■ 企画
国際交流基金

スタッフ

■ 製作

村山英治

福間順子

■ 脚本・演出

藤原智子

■ 撮影

植松永吉

■ 音楽

吉川和夫

■ 解説

バトリック・チェン

バース

(英語版)

〔南蛮文化—日本と西洋の最初の出会—〕

この映画は、外国の人々に日本の歴史の特色を理解してもらうことを目的として製作した。日本人が初めて出会った西欧文化をどのように受け入れ、それが当時の日本人にどんな影響を与えたかを、残された「南蛮屏風」や、美術、工芸品などを通して描き出している。



1543年の夏、九州南方の種子島に3人のポルトガル人が漂着した。これが日本と西洋の最初の出会であった。日本人は、彼らを南方から来た異民族〈南蛮人〉と呼んだが、この時伝えられた鉄砲は、日本歴史の方向を決定することになった。この鉄砲を戦さに大量に使った織田信長が天下を平定し、室町幕府に代わる新しい時代をつくった。鉄砲伝来から6年後には、フランシスコ・ザビエルが来日、日本に初めてキリスト教を伝えた。日本から4人の少年使節がローマに派遣され、ローマ教皇に拝謁したのもこの時代である。1570年頃からはポルトガル船が定期的に長崎に来航し、日本の銀と中国の絹との仲介貿易を行なったが、同時に西欧や東南アジアの文物が日本に流入し南蛮ブームがおこった。

しかし、17世紀に入るとキリスト教への弾圧が始まって、日本は鎖国の道をたどり、南蛮ブームは急激に終焉を迎えるが、珍しい南蛮風俗を描いた屏風や、南蛮文物をデザインした工芸品などが今日まで残されている。てんぷら、カステラ、じゅばん、ボタンなど、今日使われている言葉の中に当時の外来語を見出す他には、南蛮文化の痕跡は見事なまでに消えてしまっているが、日本歴史を通じて最も開放的だったこの時代精神の中にエキゾティシズムの影響を見逃すことはできないであろう。華やかで、しかも劇的に幕を閉じてしまったことで、今日、日本人に一種の憧憬の念を抱かせる時代ともなっている。